

李娃伝の評価

——その父親像を中心に——

唐代小説「李娃伝」は、白行簡（?~826）の作とされる伝奇小説で、恋愛を主題とした小説群のなかで、「鶯鶯伝」「霍小玉伝」とならんで代表的作品の一つとされている。この作品には従来様々な評価がおこなわれてきた。小論ではこれらの評価を整理しながら、作中に描かれている主人公の父親像―父親の子殺し―というモチーフを中心に、この作品の性格を考えてみることにした。

「李娃伝」は次のようなすじの小説である。「天宝年間、常州刺史鄭某の息子は、父親の期待を負って長安に上る。科擧受験の準備である。二十歳のこの貴公子は、長安の色町、平康里で、美妓李娃と出会う。彼は故郷からもつてきた財産のすべてをたずさえて、女の家に住つづける。女も彼を憎からず思っていたが、一年近くたつて男の財が尽き、女の仮母は、男に冷たく当たるようになる。ある日女

西岡晴彦

は、子授けの神である「竹林神」に男とともに詣でようと言う。参詣をすませて、帰り道に女のお婆の家に立ち寄ると、そこに仮母の急病を伝える使者がやってくる。女はとりあえず急いで帰宅し、あとで迎えをよこすという。ところがいつまで待っても、女からの使いは来ない。しびれをきらして帰ってみると、家は錠がかけられ、李娃は仮母もろとも姿をくらませてしまっていた。男は驚き、お婆の家に帰ろうとするが、もう日は暮れ、坊里の外へは出られない。翌日、行ってみるとお婆の姿はなかった。彼等がグルで仕組んだ金のなくなった男を追い出す計略に、まんまとひっかかったわけである。

男は憤りの末病氣になり、葬儀人夫の住む部落（凶肆）に捨てられる運命となる。ところが凶肆の人々は彼を手厚く看護してやり、彼は全快すると、その才能をみこまれて挽歌のうたい手となり、その道の第一人者といわれるまで

に上手になった。その頃、都の東西の凶肆の間で、葬儀道具と挽歌のコンクールが催されていた。男の属していた東の凶肆では、彼に新しい挽歌を教え、コンクールに出場させた。この催しは都で多くの見物人を集めて行われ、男はみごとに勝利を得た。その時、見物人の中に男の父親と、その下男で、男の育て親にあたる人物がいて、彼を父親のもとへつれていった。父親はすでに死んだと伝えられていた息子が賤業に身をおとしていることに腹を立て、「家門の恥」とばかりに鞭うち、息たえた息子を放置した。凶肆の人々はこの瀕死の男を憐れみ、親切に介抱して蘇生させてやった。しかし傷は深く、体は臭く、とうとう凶肆の人々にも見棄てられ、男は乞食となって町をさまよう身となった。

ある大雪の日、この男は、それとは知らず李娃の住む邸に物乞いに行く。李娃は、男をここまで落ちぶれさせた自分の罪を感じ、彼を家にひきとる。仮母は強く反対するが、李娃は自分の身の代金を仮母にかえし、自由の身となつて男と二人で暮らすことになった。男は李娃のひたすらな献身によつて三年の後科擧に首席で合格、成都府参軍に任官した。李娃は贖罪を果したとして、身を引き、男には身分にふさわしい相手と結婚するようにすすめる。男は承

知せず、命にかけても添いとげよう、と云つて折り合わぬ。結局赴任の途中まで女が送つてゆくことになった。その旅の道中で、成都尹兼劍南採訪使となつて任地にむかう男の父親と再会することになった。父親は息子を、以前通りの関係で遇することとし、彼を立世させた李娃の功績を賞め、二人を結婚させることにした。そして李娃をその地（劍門）におき、家を与え、正式の手続きである六礼を履んで結婚させる。その後男は出世し、子孫は繁栄し、李娃は汧国夫人という称号を天子から授けられた。

この作品は魯迅編の《唐宋傳奇集》及び汪辟疆編の《唐人小説》所収の唐代小説中、最も長い。ストーリーが曲折に富み、まさに波瀾万丈の展開をみせ、「傳奇」の名にふさわしい。また、進士と妓女の恋愛を扱つた小説のうちではこのようにハッピーエンドをもつものは数少ない。

これらの諸点の裏づけとして、この作品が当時の民間の語り物であつた「一枝花」をもとにしていて、作者は多分それを聞いたらしいことが指摘されている。つまりこの作品は当時の民衆の中に広く流行していた話柄を知識人の側がとりあげて改作したものである。「一枝花」は寅の刻から己の刻まで六〜八時間にわたつて演ぜられたというか

らかなりの長篇で、おそらく現存の「李娃伝」は大巾な窮定を経ているはずだろう。事実この作品の後半部、親子の対面から団円にいたるくだりは、叙述が、前半、中間部にくらべてせせこましくなり、展開が不自然になっているように思われる。例えば、前半分の男が女たちに欺かれて追いつ出されるくだりは一日の事件に四百四十一字、また中間部の、挽歌コンタールのくだりも一日の事件に四百九十一字をついやしているのに、後半部の、父子対面から子孫繁栄に至る、結婚、昇進から国夫人授与等を含む十数年の事件をわずか二百六十七字でしめくくっている。したがってこの部分はおそらく原作を大巾に修正し、削除したものと思われる。

さて、作者はこの作品の末尾に次のように言っている。「嗟乎、倡蕩之姫、節行如此、雖古先烈女、不能踰也。焉得不為之歎息哉」

つまり、李娃のような賤しい身分の女が、古来からほめたたえられた烈女たちでさえも及ばないようなすぐれた行いをしたことに、大いに感歎した。と云い、また

「貞元中、予与隴西公佐、話婦人操烈之品格、因遂述汧國之事、公佐拊掌竦聽、命予為伝、乃握管翰、疏而存之……」と、この作品を書くに至った動機を述べている。つまり、

白行簡は、當時有名な伝奇作家だった李公佐と、女性論を語りあっていた時、李娃の物語を公佐に語りきかせ、彼の讃同とはげましによってこの作を書くことになったのである。ここで考えられるのは、作者がもとの語り物を、自分と同じ階層の文士に再話していることである。思うに、この段階で原話のなかの李娃の「節行」や「操烈之品格」が強調されて語られたのであろう。対話というものは、無意識のうちに、相手と自分の共通の趣好の方へすすんでゆくものであるから。私は、ひとまず、作者の意志を尊重し、この作品は、作者が、李娃の「節行」と「操烈之品格」を顕彰したものとしておく。但し、このテーマはかならずしも、作品全体をおおうものではない。まして現代のわれわれから見ても、この作品の客観的に示している諸価値がそれに尽きるものでないことは言うまでもない。

二

この小説にはどうも俯に落ちない点がある。それは、主人公の父親、滎陽公の行動である。彼は息子が、優秀な頭脳のもち主であることを誇り「わが家の千里駒」と賞讃し、都へ受験へ行く際に、わざわざ二年分の費用を渡してやるほどの情愛をもっていたが、彼が挽歌歌いにおちぶれて、公衆の面前に立っているのを見て、憤激し、はだかにして

馬の鞭でたゞき殺し、死体を放置して去る。さらに数年のち、出世した我が子に再会すると「お前と俺はもどどうりの父子じゃ」と相い擁して泣く。こゝまではどうにか理解できる。つまり祭陽の大豪族としての家門の名譽を重んじ父子の情愛よりも体面を大切にするとところからでた行為がすこし誇張されて表現されているのである。ところが、その同じ男が、当の息子を落ちぶれさせ、乞食の境涯にまでつきおとした娼婦上りの女に対して、彼等の合意をおし切つて結婚させるのである。当時の法律では「妾を妻にしたり、下婢を妾にしたりする者は一年半の徒刑に処す」（唐律疏義十三卷戸卷）ということになつていた。家門と権勢の体現者であり、徹底した上昇志向のもち主であつたこの祭陽公なる男が、法の許さぬこゝういつた行動に出るだらうか。ところで内山知也氏は

「……信頼が大きければ大きいほど、天門街の葬儀店の挽歌の歌手に落ちぶれたわが子を見た時の失望は激しかったのであつて、『志行かくの如く、わが門を汚辱せり、何の面目を施してか復び相ひ見えんや』と叱責し、馬の鞭で数百も打ちのめさずいられない憤怒に變貌する。家門を代表する気位は愛する子を捨ててもいいほどに高かつた。しかし成都の尹兼劍南採訪使となり、偶然にも自分の幕僚に

わが子が任ぜられたことを知つた彼は、直ちに「われ汝と父子たること初めの如くせん」と翻心してしまふ。それだけでなく、李娃を正室と定めて婚禮を行なわせる。しかも正式の手續きをふんで。これは父子の愛と家門の名譽を天秤にかけた時、いかにも父子の愛に傾いた決断である。」と言われる。

私には、祭陽公なる人物が、息子を鞭で打ち殺して、死体を放置しておきながら、彼が出世して、官僚社会に入つてきたと知るや、にわかには、関係修復するところはいささか滑稽な感じがするだけで、その行為をこのように合理的？に解釈できない。そして親子の対面の際の描写で氣になるところがある。

「父到、生因投刺、謁於郵亭、父不敢認、見其祖父官諱、方大驚……」

つまり、この父親は息子が会見を申し込んで来た時、認めようとしなかつたが「祖父の官と諱を見て、はじめて大いに驚いた」のである。この表現は、祭陽公なる人物の性格を抉剔して余すところがない。勿論、中国には同姓の人名が多いから、息子と偽つて来る場合もある。だから父親たる者、欺されてはいけないから、疑つてかかるのがあたり前とも言えようが、私には、本人よりも履歴や証明書

を重視する官僚の生態がまざまざと見える思いがするのである。だからもし、この息子が、官界に入っていないで、会いに来たとすれば、或いは、祖父の官諱を書いた物をもっていないければ、「不敢認」のまゝになる可能性が絶大なのである。さらにこの父親は、息子の嫁をとるために

「翌日命駕、与生先之成都、留娃於劍門、築別館以処之、明日、命媒氏通二姓之好、備六礼、以迎之、遂如秦晉之偶」という行動をとる。つまり、この娼婦上りの女をあたかも貴頭の娘のごとくよそおわせ、六礼とよばれる婚礼のための仰々しい儀式をとりおこない「秦晉之偶」つまりつりあいのとれた両家の結婚の如くにしたて上げたのである。この態度は、作者の兄白居易が「長恨歌」の冒頭で、楊貴妃を紹介し、

「楊家有女初長成、養在深閨人未知」

とうたい、息子寿王の妃を父親の玄宗が奪った史実を、あたかも、深閨の処女を娶ったかのごとく美化したのと同じであり、明らかに欺瞞的なものではなからうか。これを「父子の愛と家門の名譽を天秤にかけたとき、いかにも父子の愛に傾いた決断である」と言い得ようか。私には、優秀な息子をとりこみ、また家門を汚さないように汲汲として、事務に専念している憐れむべき官僚の姿がちらついで

ならないのだが。この父親像について、内山氏は更に

「……この物語に母親が登場しないのは、「霍小玉伝」「鶯鶯伝」と特にきわだった相違であるが、婚姻の際に母親が発言権をもつらしく見える後者二篇の作品に比して、この物語は男性らしく明快で、少しも影がない。それは長く心疾を患う母親の傍にいた行簡の遠く離れがちだった亡き父に対する憧憬の表現であつたろうが、父家長的權威の象徴として登場するこの父親は、実は憎悪すべき対象ではないのである」

と論断される。こゝで言う「男性らしく明快」という評価は果して何を指して言われているのか私にはわからない。私には陳舜臣氏の次のような発言の方が興味がある。

「この伝奇はハッピーエンドである。若者の父親は常州の刺史から成都の尹に昇進し、劍南採訪使という要職を兼任することになり、息子と感激の対面をする。「わしらははじめのように父子であるぞ」エゴの鞭で息子をうち殺そうとした父親も、息子の出世した姿を見てそう言う。そのうえ、息子の話をきいて「李娃のような女こそ、おまえの嫁にふさわしいのである」と言つて、正式の手続きをふんで彼女を息子の嫁に迎えることにした。嗟乎、倡蕩の姫にして節行かくの如し、と作者の白行簡は感服してい

る。李娃の献身はたしかに感動的であろう。だが二十世紀の読者は息子を鞭うち殺す父親の物語により大きなショックを受ける。末尾で、その父親のもののわかりのよさがえがかれているだけに、嫌悪の情はいっそうつのるのだ」

この実感をぬきにして、作品の評価が可能かどうか、私には疑問である。重要なのは「二十世紀の読者」の一語であらう。ところで問題は、この陳氏の「嫌悪の情」に同感したところで終るわけではない。李娃伝の父親像が、なぜそう書かれねばならなかったか、それはこの作品を読み解く一つの大きな鍵になり得るのであるが、まだ十分に解明されてはいないからである。

三

ここで眼を転じて、李娃伝の後世における続作というべき二つの戯曲をとりあげる。前述した二つの父親像への評価のちの作品ではどうなっているのかを見、あらためて原作の問題を考えてみたいからである。前述した二つの相対する父親像は、それぞれ、李娃伝への解釈と云える。つまりそれぞれの筆者が李娃伝の父親を一方は好意的に、一方は嫌悪の対象としてうけとっているのである。

私自身の解釈を述べるまえに、ひとまずこの二篇の戯曲を問題にしようとするのは、陳氏がことさらに「二十世紀

の読者」とことわっていることに一つのヒントを得たからだ。つまり、九世紀の作品李娃伝をいきなり二十世紀にもつてくる前に、元や明の時代の文学者がどう見ていたのか、を探ることによって、作品複眼でとらえてみようということがある。李娃伝という作品は周知のように唐代の民間の語り物「一枝花」を素材として創造されたといわれる。したがって白行簡はその素材に彼なりの加工をほどこして、これを伝奇小説にまとも上げた。それとほとんど同じような工程を経て、元代の石君実や、明代の除霖もそれぞれの作品をつくったにちがいない。彼等複数の作者たちは、いわば伝統的な素材と格闘しつつ、彼等の価値観によって、新たな李娃像、又父親像をつくってきたのである。

それぞれの作中の人間像はけっして一様でなく各々の時代の倫理や美意識を負って産み出されている。このことは又逆に時代による、価値観のちがいがから、ある時代には、殆んど問題にされなかった事柄が、別の時代に重大な問題とされたり、嘗つての大問題が無視される場合もおこる。伝奇小説が、元曲から明曲へと姿を変えてゆくプロセスの中で、私は原作解釈のためのいくつかのヒントを発見できるだろう期待しているのである。

「曲江池」正しくは「李亜仙花酒曲江池雜劇」作者は石君宝である。この作品は、明の臧晉叔編の「元曲選」にのせられている。作者は平陽の人、十三世紀中葉に生きた作家である。

この作品は小説を戯曲化したところからいくつか構成上の異同があり、たとえば、小説の前半の大きな山場である挽歌コンクールなどは省かれていて、父親が息子の墮落を用人の張千から知り、挽歌うたいの現場杏園へ出かけてたゞ殺すことになっている。又同じ時に、李娃（劇中では李亜仙）に愛想つかしをさせるため仮母が彼女に彼（劇中では鄭元和）の惨めな姿を見せようと、その場へつれてくることになっていて、半死半生になった男を蘇生させるのは李亜仙の役である。

さて、殺しの場面は次のように展開する。（父親は召し使いの張千をつれて登場）父親、鄭府尹は息子の姿を見て、召し使いの張千にむかひ

「打這小畜生」（この子わっぱを撲れ）と命令するが張千は拒絶する。すると

「你不敢打、取板子過來、待我自家打」と、自ら板きれをとって撲る。撲り殺すと、

「張千、我既打死這辱子、你将他屍骸去在千人坑裏、我先

回去也」（張千、わしはこの辱知らずをうち殺した。お前はこいつの死骸を千人坑へもって行って棄ててこい。わしは先に帰るから）と言って退場する。千人坑とは無縁仏を葬る坑のことである。そのあとに次の詩が入る。

「本為求名遣入都、豈知做出德卑汚、這等辱門敗戸羞人甚、倒也 不若無兒一孤」

つまり、本来家名のために都へやった息子が思いもかけず墮落し、家名を汚したこの恥にくらべれば、彼を殺してあとつぎなしになる方がいいのだ、という父親の意志が説明されているのである。

ついで第四折の再会の場は次のように描かれている。

父親は自分と同姓の新しい県令が会いに来るのを待っている。そこへ鄭元和が登場する。

父親は

「你不是我孩兒鄭元和麼？」

と問いかけるが、息子の方は

「怎這等要便宜、我那裏是你孩兒、左右將馬來、我自去也」とまったくそっけなく云って退場する。

「分明是鄭元和一般模樣。他倒說不是、這也有甚麼難見處」（たしかに鄭元和の筈なのに、あれはちがうという。

何か都合の悪いこともあるのかしら）と云い、彼の履歴

をたしかめる。ここで気づくのは、小説とは逆に、先に父が息子を認め、あとで履歴を見ることである。履歴によって、息子が客観的に確定され、彼が自分を拒絶した理由をわかった父親は、多分彼を生きかえらせてここまで出世させたのは妻の李亜仙であろうと推測し、

「：我如今去見耶媳婦兒、着他勸元和認我：」

（わしはいますぐその嫁に会いにゆき、元和にわしを認めさせよう）

と、この新しい県官の家へと馬を走らせることになる。

父親がしらべた息子の履歴書に「妻李氏」とあり、そこからこういう展開になるのだが、ここで、小説での大きな矛盾点であった妓女と貴公子の結婚が、何の障碍もなくなされていくことに注意すべきだろう。すくなくとも元時代には、妓女あがりの女と進士の結婚について、唐時代のように、偽りの礼法を履む必要がなかったと云ってよからうか。更に、この父親は訪問して亜仙にむかって、

「媳婦兒 我当都在杏園裏打上孩兒一頓、也只要他成人、

今日孩兒得了官 就不肯認我、媳婦兒、你与我問他這個是何道理」（嫁や、わしが杏園で息子をひっぱたいしたのは、あれが大人になってほしかったまでのこと、いまあの子は官についたら、わしを認めないという。嫁や、この子にその

わけをたずねてはくれまいか？）

この身勝手な問いに対して息子は次のように反論するのである。

「吾聞父子之觀、出自天性、子雖不孝、為父者未當失其顧復之恩、父雖不慈、為子者豈敢廢其晨昏之禮、是以虎狼至惡、不食其子、亦性然也、我元和當挽歌送殯之時、被父親打死、這本自取其辱、有何讐恨、但已失手、豈無悔心、也該着人照覷、希圖再活。縱然死了、也該備些衣棺、埋葬骸骨、豈可委之荒野、任憑暴露、全無一点休戚相關之意（歎科）嗚、何其忍也、我想元和此身豈不是父親生的、然父親殺之矣。從今以後、皆託天地之佑、仗夫人之余生、与父親有何干屬、而欲相認乎。恩已斷矣。義已絕矣。請夫人勿再言。」

（私は父と子の関係というものは、天性から出ているものと考えております。子が不孝であろうとも、父たるものは子を案じる心を忘れないものであり、子たるものは、親に慈愛の心がなくとも、朝晩親につくす心をなくすことにはないはずです。だから虎や狼のようなおそろしい獣でも、自分の子を食わないのはこの自然の性（まうら）なのです。この元和は、野辺送りの挽歌をうたっていた時、父親から打ち殺されたので、それが家門の辱だったからだとすれば、別に恨

むことはない。ただ、まぢが、つて、そ、う、し、た、ん、な、ら、後、悔、す、る、
氣、も、あ、つ、た、は、ず、だ、し、誰、か、に、見、つ、け、ら、れ、て、生、き、か、え、つ、て、ほ、
しいと願つてもいいはずだ。死んでしまったとしたら死装
束、やお棺を準備して骨を埋めてくれれば、いいものを、野
ざらしにしてほつておこなつて、ま、つ、た、く、い、た、わ、り、の、氣、持、
なんかないはしない。(歎くしぐさ) あ、う、な、ん、と、忍、い、こ、う、
私この元和の身は父親の生んだものではあるまいか、なの
にこれを父親が殺すとは。いまからあととは、天地のたすけ
により、女房の余生をたよりに生きていこう。父親と何の
かわりがあるらう。認めてくれだど。恩はすでに断たれ、
義もすでに断たれているのに。女房どの、もう何も言つて
くれるな。)

これは父に対する子の決定的な絶縁の言葉である。さき
の父親の殺しの際の発言と、ここでのいいわけの間には明
らかな齟齬があり(傍点部)その点をこの論ははっきりつ
ている。そしてその結論は父子の間の絶縁を宣言するも
のであった。それを聞いて李亜仙はこの断絶の原因は自分
にあるとして自刃しようとする。この命がけの諫めによつ
て鄭元和は父と和解することになり、この戯曲は団円をむ
かえる。このプロットは、小説中では、李娃が、仕官の途
につく男と離別しようとした時、男が「お前と別れるぐら

いなら、死んでしまふよ。」といつて李娃を一時的にひき
とめるということになつていた。元曲の作者は、小説で若
い男女を離別から救い、縁結びの役を演ずる父親のかわり
に、ヒロインをあてた。以上に見られるように、伝奇小説
「李娃伝」の改作としての、元曲「曲江池」は、人物の役
割りが大巾に変えられている。そして、ここに描かれてい
る父親像は、小説にくらべていちじるしく權威を欠き、不
誠実、且つ滑稽な存在になり下つていると言えるようであ
る。

さてここで、私は小説李娃伝の末尾で、作者が提示した
問題にもどらう。小説では、六礼を履んでめでたく結婚し
た後、李娃は、「娃既備礼、歳時伏臘、婦道甚修、極為親
所眷、向後数歳、生父母偕歿、持孝甚至、有靈芝産於倚
廬、一穗三秀、本道上聞、又有白燕数十、巢其層甍、天子
異之、寵錫加等、絡制累遷清顯之任、十年間、至教郡、娃
封沂国天人。」

と、模範的な婦道の実践者となり、数々の奇蹟を生じさ
せ、夫には榮達と、自らも国夫人の榮譽を得ることとなる
のだが、この部分はいかにもつくりものの感を免れないの
である。前述したように、この物語は民間の語りものを文
芸化したもので、延々八時間の余も費して語られたという

内容に、作者が筆削を加えたりすることは、明らかであり、この部分のせせこましさは、あたかも一介の妓女が、国夫人の榮譽を得るために息せき切って急坂を駆けのぼる如き感がある、興をそがれるばかりか、ある種のいやらしさを感じさせられる。この感じは、父親が「子殺し」の下手人でありながら、節婦として嫁に迎える物わりのよい人物になりすましてしまうところで感じられるものと同質で、前述した陳舜臣氏の「嫌悪の情」もおそらくここに起因していよう。元曲「曲江池」では、李亜仙のとりなしで父子の和解が成立するところで話は終っている。前にもふれたが、曲江池では、李亜仙と鄭元和の結婚をめぐる李娃伝のような自然なプロットはなく、この二人が第四折では、すでに数年を経た夫婦としてごく自然な姿で登場しているし、女が国夫人をめざしてひたすら励むというくんだりもない。曲江池の作者は、おそらく小説李娃伝の作爲を見抜いて、その部分を削除したのであろう。

ところで、李娃伝をもとにした戯曲にもう一つ「繡繡記」がある。これは明代に作られた長篇の戯曲で、青木正児氏の解説によれば、他の雜劇に比して「此記最も原作小説の筋を忠実に敷衍せり」と云われる作品である。たしかに、曲

江池が原作に大巾な筆削を加えているのにくらべ、この作品には、李娃伝の微細なプロットに至るまで、細大もらさずとり入れられている。もちろん父親と息子の関係も、そのいやらしさもそっくりそのままである。一読して感じられるのは、曲江池にくらべると、ヒロインの婦徳を加重強調している点である。その最も甚しい例は、男女の再会後、科挙受験を目ざして勉学中の元和が、亜仙の美しい目に氣をとられて勉学を怠ると、亜仙がわが目を別つて彼を諫めるといふ一段（第三十三齣、剔目勸学）が挿入されていることだ。これは何ともやりきれない被虐的貞女像である。

さらに亜仙の婦徳が上聞に達して、皇帝の詔によって彼女に国夫人の称号が下されるくんだり（第四十一齣 汧国流馨）などが付加される。

「成都參軍鄭元和妻李氏、本係鳴珂妓女、乃能剔目毀容、勸夫勉学、卒底於成。雖古先烈女、不能踰也、玆用封為汧国夫人。」この詔の主意は、亜仙の行為の中から「剔目勸学」を特筆している。この異常な行為が、いわば身分制の羈絆を脱するための切り札になっているのだ。（なお傍点部は、小説李娃伝の末尾の作者のコメントをそのまま取り入れたものである。）私は唐代伝奇「李娃伝」を忠実に祖述したとされる明代戯曲「繡繡記」におけるこのよう

な加筆は、おそらく戯曲作者が、原作の「彼女が貴公子の正妻に迎えられ、国夫人になる」という筋立てのもつ不自然さをカヴァーするために案出したものと考えたい。次に、作中の父親像にかかわる一こまを例示しよう。この劇では、父親とその妻すなわち主人公の母親が登場する。父親が息子を叩き殺したあとで家へ帰り、その旨を告げると母親が驚きのあまり泣き倒れ、夫に抗議する場面で、次のようなやりとりが交される。(紙巾の都合で原文を省く)

妻「旦那様、貴方は子供ができなかつた頃、男でも女でもかまわぬと、万策つくしての神だのみで、五十日もたつてやつと授かり、大きな苦勞をなされたのに、ちよつとしたことであれを打ち殺し、鄭の家のあとつぎを絶つてしまわれしました。われらはもう七十歳にもなり身よりは誰もいなくなつた。この先どうなることやら」

夫「おまえ、心配するでない。わが家の家系は絶えることない。わしが養子を一人とればすむことじゃ、泣いたとて何にならう」

「養子など、血のつながりがありませぬ。昔から虎狼でさえもわが児は食わぬというのに貴方は自分の肉身を傷めつけ、なんと殺してしまふとは」

「死んでしまった者に、泣いたとて何にならう。わしには妾どもが多いゆえ、天の恵みでまだ一人ぐらい授かるかもしれぬ」(第三十齣、慈母感念)

男の無責任な便宜主義が浮かび上がってくるやりとりである。注意すべきは、妻のせりふ中の「昔から……」(自古道虎狼不食兒)は「曲江池」の中の息子が父親を非難することば「是以虎狼至惡 不食其子」と呼応していることだ。

「繡襦記」は「曲江池」にくらべて格段に保守的な儒教モラルをバックボーンとし、さきあげた「剔目勸学」のようなおよそ非人間的な婦徳の強制や 皇帝権力によるその美化という側面をもつ。にも拘らず、父親に対する眼は決して甘くない。すくなくとも、母親の子への慈愛の情にくらべて、この齣に描かれた父親は作者によって好意的には扱われていないのである。

四

さて、私は、唐代小説李娃伝における父親像を、元曲「曲江池」及び明曲「繡襦記」によってたしかめてみた。この両者は、前者を革新的、後者は保守的と呼んでよい性格をもつものであった。そして対蹠的に見えるこの二つの改作において、父親像はいずれも肯定的には描かれていなかっ

た。前者では、父親は息子から縁切りを迫られ、嫁によって救われる立場に立たされ、後者では、子を慈しみ愛する母親と対比されて、その性格は軽薄残酷に見える。私は小説李娃伝の父親の形象に見られた或る種の滑稽さを発端に考えてきたが、ここですくなくとも十三世紀から十六世紀頃までの二人の改作の作者とは、この父親像が肯定的存在でないという点において評価を共有できたのである。ここから私は、小説李娃伝を見なおしてみたい。その前に現代中国での李娃伝の評価を一瞥してみよう。

中国においては、この作品における結末の部分をもぐって大まかに言って二つの見方がある。その一つは、李娃の男との結婚を、当時の門閥中心の封建的な身分制度への諷刺乃至は抗議、又は挑戦ととり

「作者が市民階級の願望をこの作品に反映させたのだ」とする。もう一つは、

「このハッピーエンドは、当時の社会的現実からかけはなれたものであり、李娃を封建道徳の権化にしたてあげることで醜悪なる現実を美化したものだ」とする。

両者は、いずれも、この小説の性格の一面を言いあてているものの、十分に私を納得させてはくれない。

この小説の面白さは、大都市、長安の狭斜での歓楽生活

であり、又凶肆とよばれる葬式人夫の生業なりいであり、とりわけ、都を二分する葬儀屋組合の競演会、挽歌コンクールなどのお祭りさわぎを背景とした舞台に、貴公子から挽歌うたい、更には乞食にまで落ちぶれた男が、女の愛によって立ちなおる姿であり、その男への愛を貫き、そつと身をひいていこうとするいじらしい娼婦の生きざまであった。また、権勢と名譽の亡者や世故に長けた遺手婆の悪どいやり口と対照的に、若い二人の愛を社会の最底辺からしっかりと支えている庶民たちの心の温かみである。登場人物はこの舞台を十分に生き生きと動きまわり、享受者をたのしませてくれる。これはまさしく、庶民の間で語りつがれた「一枝花」のもつ生命力なのである。

中国におけるこの作品への評価が、これらこの作品のもつ魅力よりも、この作品が究極において示す結論を重視し、それを文学の社会的効用性という唯一の価値基準の鋳型に性急に於てはめようとしている点に、私は不満を感じざるを得ないのである。言うまでもなく、文学作品は後世の文芸批評家や、社会革命家のために書かれたのではなく、それを直接に享受する人々のために書かれたはずなのであり、評価の原点をそこに据えるべきである。「一枝花」はさきに述べたストーリーを、女の気を引くためにわざと

馬鞭を落すシーン、遺手婆さんの巧妙なトリック、挽歌コンクール優勝の場、残酷な子殺しとそれにつづく看護と蘇生、大雪に行き悩む乞食青年を華麗な繡繻で抱きとめるクライマックスに至るまで実に多くの見せ場(聞かせ所)をもっていて、聴衆はおそらく手に汗を握る思いで物語りに聞きいていたにちがいない。それは現存の小説李娃伝からでも十分に想像し得る情景なのである。ところが二人の恋人の劇的な再会以後、娼婦廃棄、受験勉強、合格、結婚と李娃が庶民の場から士大夫の側に移しかえられ士大夫ごみの女に改造されてゆくプロセスは、さきにもふれたようにはなはだ精彩を欠く叙述がつづく。その中で、例の父子の再会が語られるのである。語り物「二枝花」に、果してこのプロットがあつたかどうか、今は知るよしもないが、進士の試験や、その後の任官、名刺による人間の確認、わざわざ六礼を設けてとりおこなう婚礼のエピソードに大きな関心をよせるのは、手に汗を握ってストーリーを追っている庶民大衆ではなくて、おそらく作者と同じ階層の人々であつたらう。つまり作者は、彼と彼の親しい友人たちの好みにあつた李娃像をこの箇所で鋭意造形したにがいないのだ。そのために作者は敢えて当時の社会通念をも破って娼婦を士人の正妻にさせる必要があつたし、子殺しの父親を

変身させ、物わかりのよい男にしたてあげねばならなかつた。こうした作意は「封建的身分制度への」「諷刺」や「挑戦」ではなく、むしろそれへの「従属」「一体化」とする方が正しかろう。但しそれを「醜悪なる現実の美化」と断ずるのはおかしい。作者はその現実を肯定しているのだから。結局のところ作者は自らの立場からあり得べき姿の女性像を造形したまでである。このようにして、小説李娃伝は、民間の語り物から脱け出し、文芸作品として成立した。そこに描かれている父親像の不整合性は、庶民の文芸が士大夫の世界に吸収されてゆく際に、十分に消化し切れなかつた残存物のごときものであらう。後世の続作者たちは、この残存物をそれぞれの時代の価値観にもとづいて独自の方法で消化していったのである。

以上で私の李娃伝についての考察を終えるが、この拙い試論の動機になつたH・Rヤウス「挑発としての文学史」の一節をひいてエピローグとしよう。

「文学作品は、それ自体で成り立っている客体などではなく、どの時代のどの観察者にも同様な姿を示すことはない。文学作品は記念碑ではなく、独自のにその時代を超えた本性を開示するものではない。それはむしろ総譜のようなもので、読むたびにいつも新たな共鳴をおこすように作

られていて、その共鳴音がテキストを言葉の素材から解き放ち、アクチュアルな存在、「語りかけると同時に、それを聞く能力をもつ対話者を創造しなければならない言葉」にするのである。

註

註1 内山知也〈隋唐小記研究〉S52木耳社刊「白行簡と李娃伝について」

註2 陳舜臣〈唐代伝奇〉朝日新聞社刊（S49年）。

註3 「元曲選」に収められた「曲江池」は必ずしも元時代の石君宝の原作ではなく、編者臧晉叔による改作とする説が有力だが、ここではその問題にはふれない。テキストは、中華書局一九六一年版を用いた。

註4 青木正児〈支那近世戯曲史〉青木氏は作者を薛近兗としている。いま六十種曲本（中華書局 一九八二年版）をテキストとする。作者は徐霖。

註5 前者は、吳志達〈唐人伝奇〉一九八一年、上海古籍出版社等。

後者は、唐昇明〈读《霍小玉传》兼读《莺莺传》及《李娃传》〉文学遺産 一九八三年、第三期 等。

註6 H・Rヤウス著、嚮田収訳 一九七九年 岩波書店刊。